



TITLE:

韓国との学術交流: 国際教育研究フロンティアB 2010年度「韓国の教育課程(カリキュラム)変遷」

AUTHOR(S):

大下, 卓司

CITATION:

大下, 卓司. 韓国との学術交流: 国際教育研究フロンティアB 2010年度「韓国の教育課程(カリキュラム)変遷」. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2011, 中間報告書(2010年度): 28-28

ISSUE DATE:

2011-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179634>

RIGHT:

国際教育フロンティアB 2010年度 「韓国の教育課程（カリキュラム）変遷」

1. 概要

2010年7月29日（木）・30日（金）に、韓国延世大学教育大学院の外国語としての韓国語教育科教授の康承恵（カン・スンヘ）氏による集中講義が第一演習室（総合研究2号館）にて行われた。集中講義には、約20名の学生が参加し、熱心に耳を傾けていた。



▶授業される康承恵先生

2. 集中講義の内容

講義は、「韓国の教育課程の歴史」、「遂行評価（performance assessment）」、「入学査定官制（admission officer）」という大きく3つから構成された。まず、戦後の「韓国の教育課程の歴史」は、第一次教育課程から第6次教育課程を過去とし、1997年以降続く第7次教育課程を現在とに大別された。1950年代から1970年代にかけての反共教育や、第5次教育課程（1987～92年）以降重視されるようになった、教育課程における地域性などの特徴が見られた。他方、現代の第7次教育課程では、21世紀の世界化、情報化時代に合わせる創意的な韓国人の育成を目的とする改革が行われた。中でも、初等学校1年生から高校1年生までの10年間の義務教育とされるようになり、学校教育制度・内容の面で大きく変化した。

以上のように、教育課程の歴史的展開を概観したのち、現在の教育改革の焦点となっている「遂行評価」について講義が行われた。そもそも、遂行評価とは学生が自ら自分の知識や技能を表すために産出物（作品）を作ること、行動で表すこと、答えを構成することなどを要求する評価方式を意味する。講義では、遂行評価の理論とともに、学校教育現場における事例ビデオが紹介された。一般的な公立学校の平素の教育実践を見るべく、ソウルから1時間程郊外の一般的な公立小学校の英語（6年生）と算数（5年生）の授業が紹介された。英語の授業に着目すると、ここでは未来形が指導された後、子どもたちにはペアで未来形を用いた会話をを行うという課題が出された。夏休みの間の予定、すなわち“What will you do this summer?”に対し、未来形を用いて英語で簡単に述べたり、質問したり、質問に答えたりする課題であった。生徒は各自で文を考え、ペアで練習したのち、他の生徒の前に出て発表することが求められた。この授業の特徴はやはり評価にあった。この課題に取り組むにあたり、生

徒は、教師らが評価に用いる評価基準（ルーブリック）に関して説明を受け、どのように取り組めばよりよいものになるのかについて事前に知ることができた。このよう韓国では、すでに遂行評価が平素の授業にまで浸透していることが如実に伝わる事例であった。パフォーマンス評価について本年度改訂された指導要録に記載された日本において、こうした事例は示唆的なものと言えよう。



▶子どもの作品例（ポートフォリオ）

最後に、入学査定官制について講義がなされた。この制度は、入学査定官が多様な選考や学生の潜在的な能力及び素質などを評価し、選抜する評価制度である。彼らは独立した行政補職であり、年間を通じて大学入試関連業務を遂行する専門職に位置づけられている。年間を通じて、高校や大学の教育課程を分析し、情報の蓄積及び管理を行い、効果的な選考方法の研究開発を行い、選考期間中は、多様な試験資料を審査し、学生の入学可否を決定する。さらに入学後には、学生の学業や、学校生活を支援する制度である。このような制度は、筆記試験、一度きりの機会といった旧来の入学試験問題点を克服し、包括的に学生の能力を評価することで、大学が求める学生の入学の一助となっている。講義では、現在導入されているこの教育制度の背景や、現状、課題に関する詳細な説明がおこなわれた。こうした、先進的な入試選考の事例は、日本の入学試験について考察する上でも豊かな知見をもたらすものと考えられる。

さて、講義においては、以上3つの内容に関して、適宜質問の時間がとられた。参加した学生からは、韓国における漢字教育の歴史や現状について、教育費における私費負担の割合が高い韓国における経済格差と学力の関係について、都市と地方の地域格差についてなど様々な質問が寄せられ、有意義な集中講義となったことが窺える。



（文責：大下 卓司）